

吉村昭記念文学館 ニュース 万年筆の旅



vol.10

平成30年3月31日発行
登録番号(29)0091号
編集・発行/荒川区
問合せ/
荒川区地域文化スポーツ部
ゆいの森文学館係
〒116-0002
東京都荒川区荒川2-50-1
TEL.03-3891-4349

題字/津村節子氏
切絵/山崎達郎氏

【開館時間】
9時30分～20時30分
【休館日】
毎月第三木曜日・年末年始
・特別整理期間等
【入館料】
無料

DVD「小説家 吉村昭」 が表彰されました

平成28年度に吉村昭記念文学館が制作した、吉村昭関連証言映像の総集編DVD「小説家 吉村昭」(制作委託/毎日映画社)が公益社団法人映像文化製作者連盟主催の「映文連アワード2017」※において、優秀企画賞を受賞しました。平成27年度にも展示コンテツとして制作した映像「北へ注がれる視線〜吉村昭と北海道〜」が同賞を受賞しています。なお、今回は一般財団法人日本視聴覚教育協会から、優秀映像教材選奨の優秀作品賞(教養部門)※としても表彰されました。

本映像は、平成25年度から平成28年度にかけて、荒川区で制作した短篇映像10本を再編集したもので、津村節子氏をはじめ同人雑誌時代から親交のあった瀬戸内寂聴氏、さらに吉村を担当した出版社の元担当編集者の証言から「小説家としての吉村昭」の実像に迫った作品です。

今回の受賞については新聞でも取り上げられました。
※「映文連アワード」とは
プロフェSSIONナルの仕事にふさわしい

作品を発掘・顕彰することにより、短編集業界の活性化を図るとともに、次世代を担う新しい才能を発掘し、映像業界のインキュベータとしての機能も担うことを目的に、平成19年に創設されたものです。

※「優秀映像教材選奨」とは

新作の教育映像および教育デジタルのコンテンツのうち、すぐれた作品を選奨し、表彰するものです。日本で実施されている映像コンクールの中で、主に学校教育・社会教育・産業教育の「教材」としての視点から選奨が行われている唯一の賞です。



平成29年11月27日
「映文連アワード2017」
受賞トロフィー

購入方法

1枚二千円(税込)でゆいの森あらかわ一階総合カウンターにて販売しています。そのほか、郵送での購入を希望の場合は、現金書留又は定額小為替で、DVD代金を送料の切手(一枚購入の場合は二百五十円)と併せてお送りください。(DVD名・氏名・住所・電話番号を明記したものを同封)。

映像の内容 (44分)

- ◆プロローグ
- ◆小説家への道
- ◆「星への旅」そして「戦艦武蔵」
- ◆創作姿勢
- ◆戦史小説から歴史小説へ
- ◆長崎・北海道
- ◆作品が語る吉村昭
- ◆妻 津村節子と共に
- ◆ふるさと荒川区と吉村昭



DVD「小説家 吉村昭」

荒川区功労者表彰式

荒川区では、区の発展のために尽力された方の功績をたたえ、感謝の意を表すため、毎年荒川区功労者表彰式をおこなっています。平成29年度の特別功労者(区政に特別の功績を有した方)として、津村節子氏と山崎一穎氏が表彰されました。

両氏ともに、区内外から高く評価される文学館の開設に当たり多大な功績があり表彰されました。津村氏は、多くの貴重な資料を区に寄託するとも



平成29年11月9日
荒川区功労者表彰式にて受賞される、
津村節子氏(上)と山崎一穎氏(右)



に、家族だけが知る吉村昭像など示唆に富んだ助言をいただきました。また山崎氏は、文学館のあり方に関する懇談会座長等を務められ、卓越した識見と専門知識をもって多くのご意見・ご提案をいただきました。
津村氏は受賞者代表として挨拶され、「私をご挨拶致しますことは、僣越で身が縮む思いでございます」と恐縮した様子でした。
また荒川区について、「文化的で本場に情が篤く、住み心地が抜群な街です」と満面の笑みでお話されました。

おしどり文学館 協定特集

日時：平成29年11月5日(日)

15時～15時50分

場所：ゆいの森あらかわ

ゆいの森ホール

協定締結者：西川一誠（福井県知事）

西川 太一郎（西川区長）

立会人：津村節子（作家・吉村昭夫人）

平成29年11月5日、「荒川区立ゆいの森あらかわ吉村昭記念文学館」と「福井県ふるさと文学館」との間で、「おしどり文学館協定」を締結しました。当日は、百名を超える関係者、来館者に見守られ協定締結式が執り行われました。

協定締結の経緯

荒川区と福井県の交流は、橋本左内や杉田玄白など福井県ゆかりの偉人が荒川区と関係が深いことから、平成16年に福井県の西川知事が西川区長を訪問したことを契機に始まり「福井県ふるさと文学館」が、平成29年3月26日には「荒川区立ゆいの森あらかわ吉村昭記念文学館」が開館しました。吉村昭夫人で福井県出身の芥川賞作家・津村節子氏には、

福井県ふるさと文学館特別館長、ゆいの森あらかわ名誉館長を務めていただいています。文壇で「おしどり夫婦」として有名であったお二人になぞらえ、両館を「おしどり文学館」とし、絆を深めていきたいと考え、協定を締結することといたしました。

協定の内容

互いに協力し合いながら友好親善を深めるとともに、ゆかりの文学を両地域内外に広く紹介するために、主に3つの事項について連携を図ってまいります。

- ① 展示の共同開催に関すること。
 - ② 資料の相互貸借に関すること。
 - ③ 住民及び職員の交流に関すること。
- 両館合同の企画展等を開催。
- 資料貸出を簡便な方法で実施。
- 住民及び職員の交流に関すること。
- 両地域の住民の交流及び職員同士の情報交換等を実施。



協定書

協定締結にあたって

福井県知事からは、「今、大都市と地方、様々な意見があると思います。皆が力を合わせて協力することが大事であると思います。そのような意味で今回のこの協定が、荒川区福井県そして日本の文学の発展にとって大いに意義のあることとなりますよう心から願います」と挨拶がありました。

また、荒川区長からは、「11月5日は、吉村先生ご生誕90年の年となります。このような記念すべき時に、協定を締結したことで、両館が絆を深め、互いに協力し、魅力をさらに高めていけると考えております。今後吉村先生、津村先生の作品をはじめとする、ゆかりの文学を広く紹介することで、両地域の文化の向上、発展に貢献していきたいです」と挨拶がありました。



「おしどり文学館協定」を結んだ西川知事(左)と西川区長(右)、立会人の津村氏。署名を終えて協定書が披露されると、会場からは大きな拍手が送られました。

全国初の協定

全国にある文学館同士で、姉妹館協定はこれまでも結ばれてきましたが、夫婦館としては、今回が全国で初めての取り組みとなりました。当日ご臨席いただいた、跡見学園理事長・全国文学館協議会会長の山崎一穎氏からは、「ご夫妻ともに表現者というおしどり夫婦は全国においてになりませんが、それぞれの出身地に文学館が建つことは稀です。ましてや、おしどり文学館ということになりますと、全国の文学館でも初めてのことで。一般に仲の良い夫婦であっても、結婚記念日を忘れるということがありません。そうならないように、両文学館は毎年この時期をおしどり文学館として、末永く偕老同穴の契りを、展示に表現していただくよう祈念しています。双方で人が動き物産が動き、そして市民交流が、文化交流に広がることを希望します」とご祝辞をいただきました。

「作家夫婦」について

当日立会人を務められた津村氏からは「小説を夫婦で書いているということは大変なことですよ。小説を書くときはお互いによく相談をするのでしょと言われます。小説を書くのに夫婦で物を書いていて、お互いに何を書くとか、こうしたらどうだろうとか、そんなこと相談なんてし

ませんよ。お互いに何を書いているか全然分かりません。私は幾つか(吉村の作品を)読んでますよ。でも吉村は私の芥川賞受賞作の『玩具』も読んでないんですから。そういう夫婦ですから、作家の夫婦とはそんなものですよ」と時折笑みを浮かべながら会場の皆さんにお話されました。

そして、「私は福井の文学館も荒川区の文学館も吉村に見せてやりたかったなと思います。今日は吉村がいなかったことが、唯一残念ですが、吉村がいたら…いるかもしれません、来てますよ、きつと」とおっしゃりながら、挨拶を締めくくりました。

協定書に署名をする津村氏



津村氏の恩賜賞・日本芸術院賞授賞式にて平成15年(2003)6月2日

協定締結記念展示

協定締結を記念し、両館では12月20日まで特集展示を開催しました。

協定締結にあたり津村氏より文章をお寄せいただきました。

おしどりは鴛鴦と書き、鴛は雄、鴦は雌で常につがいで泳いでいることから、夫婦仲がむつまじい象徴とされている。荒川区は吉村昭の出生地であり、北陸の福井県は津村節子のふるさとで、荒川区の吉村昭記念文学館と福井県ふるさと文学館がこの度おしどり文学館協定を結ぶこととなった。

吉村は昭和2年東日暮里に生れ、空襲で家を焼け出されるまで住んでいた。津村は小学校4年修了の年に、東京で勉学させたいという父の希望で目白駅近くの淀橋区下落合に転居した。

吉村昭と津村節子は生涯文学の道を歩みたいという夢を抱いていたが、吉村は結核を病んで進学が遅れ、津村は両親が死去して自活するためにドレスメーカー女学院に進み、疎開先で洋裁店を営んでいた期間がある。昭和25年に学習院女子短期大学が開学され、津村は翌年二期生として入学した。学習院大学文芸部の存在を知って押しかけ入部すると、委員長の吉村は守衛が助教と間違えて敬礼するという少し老けた学生だった。同じ志を抱いていた2人の偶然の出会いであった。

展示では、両館において協定締結の経緯や、お互いの館の紹介、吉村・津村ご夫妻の歩み等を紹介しまし

た。また、当館では福井県所蔵の、津村氏が描いた福井ゆかりの作品として「炎の舞い」や「白百合の崖」、「絹扇」の自筆原稿(複製)を、福井県ふるさと文学館では、当館蔵の吉村氏が描いた荒川区ゆかりの作品として「私のふる里―日暮里」や「影義隊」の自筆原稿(複製)を作品の紹介とともに展示しました。協定締結後には、両館で協定書の原本を展示し、来館者に披露しました。

また、ゆいの森あらかわのアントランスホールにおいて、荒川区と福井県が連携を図りPRブースを設け、福井県ゆかりの作家の書籍展示や福井の食文化・観光地の紹介等を行い、来館者に福井県の魅力を紹介しました。



福井県ふるさと文学館での展示の様子(上)



吉村昭記念文学館での展示の様子(右)

福井県ふるさと文学館

福井県ふるさと文学館は、図書館、文書館と併設されています。

展示室には福井ゆかりの作家29人と福井を描いた様々な作品を紹介するゾーン、日本の近現代文学を代表するゆかりの作家5人(津村節子、水上勉、高見順、中野重治、三好達治)を紹介するゾーンの3つがあり、画展を開催するゾーンの3つがあり、自筆原稿や愛用品、映像・音声等を紹介しています。

このほか、著名作家の講演会や文芸創作講座等も行なっており、文学に親しみ、学び、交流できる施設です。

4月14日～6月27日まで展示「幕末の福井を描いた小説」において、吉村昭の「天狗争乱」「雪の花」などの作品も紹介されます。観覧料は無料、福井駅から館までは無料の巡回バスで行くことができます。詳しくは同館までお問い合わせください。



福井県ふるさと文学館

〒918-8113 福井市下馬町51-11
【電話】0776-33-8866
【開館時間】午前9時～午後7時(土・日・祝日は午後6時)
【休館日】毎週月曜日(休日の場合は翌日)・祝日の翌日(翌日が土曜、日曜の場合は除く)・第4木曜日ほか

展示報告

◆吉村昭生誕90周年記念企画展

「吉村昭とふるさとあらかわ
〜生い立ちとその作品世界〜」

会期：平成29年10月28日(土)～

12月10日(日)

本展では、荒川区で過ごした幼少期から青年期にかけての写真やゆかりの品から小説家吉村昭の原点をたどり、写真や自筆原稿、作品に関連する挿絵など約80点の資料を通して、吉村の描いた作品世界を紹介しました。



企画展チラシ

吉村昭の原点、荒川区

吉村は、昭和2年、現在の荒川区東日暮里六丁目目で生まれ、昭和20年4月の空襲で家を焼失するまで荒川区に住んでいました。多感な時期を荒川区で過ごし、その時の体験は「吉村昭」の原点になりました。

展示の第1章「日暮里の商家に生まれて」では、日暮里で製綿工場を営む商家に生まれてから開成中学校を卒業するまでを紹介しました。

凧やベイゴマなどに熱中し、少年らしい子ども時代を過ごした吉村でした

が、後に家族を病気や戦争で相次いで亡くし、自身も肺結核を発病します。さらに、空襲で家を焼失するなど、この時期の体験や記憶が、「死とはなにか、生とはなにか」を主題に書き続ける動機となったことを随筆や写真などを通して解説しました。

作品にみる荒川区

第2章「吉村作品にみるふるさとあらかわ」では、荒川区が舞台地となった作品を展示しました。吉村の生家に近い旧三河島(現荒川)や町屋が主要な舞台地として描かれた自身初の長篇小説『孤独な噴水』や、幼い頃から馴染んだ三河島、尾久界隈が重要な舞台となった最後の長篇小説『彰義隊』などを紹介しました。

また、吉村が「ふるさとあらかわ」で過ごした思い出を綴った随筆『東京の下町』に掲載された画家永田力の挿絵原画8点を展示しました。このほか家族の死や戦時体験を反映した自伝的連作短篇小説集『炎のなかの休暇』などもとりあげました。

吉村昭と荒川区

エピソード「吉村昭とあらかわ」では、平成4年、荒川区区民栄誉賞を受賞した吉村が、顕彰式の会場でベイゴマの腕を披露する写真や、生まれ育った日暮里の情景や記憶が綴られた「私のふる里・日暮里」の自筆原稿などを紹介しました。



「東京の下町」の挿絵原画等を展示

企画展関連イベント

今回の企画展では、関連イベントとして、吉村昭講演録を聴く「解体新書の周辺」を開催しました。このイベントでは、平成6年10月24日、角館図書館後援会主催文化講演会にて収録した吉村の講演をお聴きいただきました。

吉村は日本初の本格的な西洋医学の翻訳書「解体新書」の成立過程を、長篇歴史小説『冬の鷹』で描いています。『冬の鷹』は、学究肌の前野良沢と世間的栄達の道をたどった杉田玄白を対比させながら、良沢の生き方に光を当てた作品です。

講演の中で吉村は、鎖国下にあった当時の日本において、解剖に対する日本と海外の意識の差や医学の向上に力を注いだ前野良沢、杉田玄白らが腑分けの見学を経て解体新書出版する中

でのエピソードについて語っていました。

今回のイベントは、生前の吉村の声を聴くことができる貴重な機会となり、会場では、講演に耳を傾ける方や熱心にメモを取る方の姿が多く見受けられました。



吉村が講演時に使用した自筆メモ



講演する吉村 (平成6年10月24日) 角館図書館後援会蔵

また、今回の企画展では、当文学館学芸員による展示解説を2回開催しました。写真パネルや展示資料の説明をはじめ、吉村の様々なエピソードを交えた解説により、参加された方々は当時の吉村と荒川区のまちを思い浮かべている様子で大変好評でした。

今後イベントや展示解説を通して、吉村の生涯や作品等を分かりやすく紹介してまいります。